

疎外された人々への 理解と信頼関係の 構築が重要

ペルーはかつて反政府ゲリラ活動でアンデスの山岳地域を中心に莫大な社会経済的損失・混乱に苛まれた。現在もコミュニティー崩壊、住民の精神障害などその後遺症は根深く残っている。多くの住民は零細な農牧業を中心とした自給生活を営み、将来の希望や夢を持つことも許されないかのよう。そうした脆弱な立場の人々に、どのような支援が求められているのか。



JICAペルー事務所長

表 孝雄
Omote Takao

ルーでは人口約2800万人の半分が貧困層に、4分の1が極貧に属しています。1980年に武装蜂起した反政府ゲリラは、現在は制圧されていますが、一時期国内戦争の様相を呈するまでに膨張したのも、激しい貧困格差によるところが大きい。

このアンデスに偏在する貧困への対策は、歴代政府が優先課題として取り組んできました。JICAも、アンデスの疎外された人々への支援に力を入れていきます。中でも重視しているのが、本来付与されるべき権利が行使できない状態にある人々やグループのエンパワメント。また、効率的で小さな政府への流れの中で、行政が受け持っていた役割を「コミュニティー」が担っているよう、「コミュニティー」の能力を強化することです。

約20年間、ゲリラによる破壊活動と治安当局との武力衝突が繰り返され、多くの住民が犠牲となりました。2001年にこのテロ活動の真相究明と和解を目的とする委員会が設けられ、調査が行われた結果、約6万8000人が命を失い、暴力被害による心的外傷後の精神的・心的健康障害も深刻であることが判明しました。

この問題に本格的に対処するため、JICAは、包括的ヘルスケアを提供できるよう、医療人材養成プログラムを確立し、現場の保健医療従事者の技能向上を支援しています。また、母子保健の改善と地域保健活動の推進を目的に5つのパイロットサイトで活動を展開中です。当初案は人材養成に軸を置いていましたが、真に援助を必要としている人々に援助を届け、開発アクトー足る能力を開発し、彼らを支援する公的機関に協力することにも「コミュニティー」を強化するという「人間の安全保障」の考え方に立脚し、修正を加えました。

「人間の安全保障」の実践は、困窮している人々を開発事業の中心に据えることで、彼らに対する理解が一層求められます。彼らは、選挙マニフェストなど約束の度重なる不履行や横領などを伝統的に経験しており容易には信頼しません。脆弱さゆえに危機に陥りやすく、過酷な環境は夢や希望を打ち砕きます。何よりも自らの社会生産活動に価値を認識していない。もし優れた能力が付与されるならば、今の生産活動を放棄するでしょう。そこには自信・自尊心は極めて希薄。自らを疎外された者という自意識を形成している人たちが多いようです。

そんな中、現在実施中の貧困層向け耐震アドベ（日干しれんが）住宅の普及プロジェクトでは、アンデスの伝統的工法であるアドベ建築をもとに、廉価で耐震性・衛生的設備を備えた住宅を普及すべく、住民がその工法を学んでいます。それまで住民自身も価値を見いだせなかったアドベ住宅に価値を付与したことで、伝統的工法を見直すと同時に自ら社会的価値を創造できることに気付く人も増えていきます。

人間の安全保障の対象となる人々は専ら未成功の経験を繰り返しており、能動的姿勢をはぐくむことが難しい。また、彼らの多くがいかに生き延びるかに傾注せざるを得ません。そんな彼らの生活の現実や文化に対する理解、そして尊重なくしては、彼らへの接近は困難です。まずは手の届きそうなところから協働し小さな成功を積み重ね、距離の縮小を図る。彼らもその過程で徐々に自信・自尊心が醸成され、それが一段上のレベル、あるいはほかの領域に目を向けさせるのではないかと。そうした信頼関係の構築などの環境づくりと成果発現の活動は濃くて長い時間を要します。